

古典的マルクス主義の終焉

ポール・カードン

Redefining
Revolution

by Paul Cardan

Solidarity
Pamphlet/44

今日、三つの大きく重い事実が、今なお現実の進行を十分に把握しつつ行動したいと望んでいる革命家の前に立ちふさがっている。

(a) 現代資本主義の機能は、一九三九年以前の実情と比較するならば、根本的に変わった。マルクス主義による分析と比較するならば、更に大きく変化している。

(b) 資本家の搾取に対して、断固として、且つ永劫的に闘争する組織化された階級運動とみなされている労働者階級の運動が、消失してしまっ¹た。

(c) 「先進国」の「後進国」に対する古典的な植民地あるいは半植民地支配の方法は、後進諸国においては大量の力を獲得した天才的革命家をどこにも生み出すことなく、それ故先進諸国において資本主義の土台を揺り動かすこともなく、その方法は全般にわたって破棄され²た。

1、われわれは、労働者階級が消失したといっているのではなく（それは馬鹿げたことだろう）、しかし、その組織（労働組合と労働者

の政党）が全体として搾取社会と一体化し、今や労働者階級を解放する手段としてよりはむしろその障害物となっている。（とくに断りのない注は、ソリダリティーによるもの）

2、（アフリカにおけるポルトガル人のような）ある行為は、より「進んだ」そして処世にたけた部分（イギリス、フランス、オランダ、ベルギーなど）が現在十分に同化したこと、言い換えれば、継続的な搾取が軍隊の物理的存在や抑圧の直接的形態を必要としないことをまだ学んでいないヨーロッパの資本家階級の、一定の部分の遅れとして単に反映するにすぎない。

2

自己欺瞞を拒否する人々にとって、これら三つの事実が、現実、一八四七年から一九三九年にかけて形成、発展、保持されてきた思考・行動体系としての古典的マルクス主義を崩壊に追いやったことは明らかで

ある。つまり、この三つの基本的な観察が暗示するものは、マルクスの大著（経済分析）における資本主義分析、レーニンの帝国主義理論、トロツキーの後進諸国に適用される永続革命論に対する反駁（あるいは克服）である。それらは、組織と行動の伝統的形態（革命期のそれらを除いた）全ての、実質上の打ち消しがたい破壊を示している。

この三つの観察は、現実と確かな関係を持った具体的な思考体系としての古典的マルクス主義が崩壊したことを意味する。二、三の抽象的考へはさておき、今日の現実のなかでは『資本論』³が中心課題でないことが理解される。逆に、今日の現実（仕事の性格の変化と危機、形式上の生産組織と現実機能にしている組織との間に、機関の公的機能と実際の機能との間に横たわっている分裂と衝突、官僚化の現象、消費社会、労働者階級の「非政治化」、東欧社会主義体制の階級的性質、「後進諸国」の発展や「先進諸国」とそれらとの関係、日常生活の多方面にわたる危機、以前は度外視されていた種々の現象が引き起こす重要性の増大——この危機を解決しようとする人々の試案を述べるのではなく）が、中心課題であり——この一切が、正しい理解のために異なる型の分析を必要としている。事実、マルクスの著作のもっとも優れている点は、このような分析にとって刺激となりうることであろうが、ただし、マルクス主義の全的墨守、守護者をのみ自称しこととする俗悪で退化したマルクス主義は、今日、現実を正確に理解するためには障礙となっている。

われわれの基本的な三つの観察は、いかなる好機においても革命家がとるべき行動のための一連の行動綱領、労働者階級自身の実際行動と総括的理論における概念（少なくとも革命家の志向においては）緊密に

関連した一連の行動綱領としてのマルクス主義（付随的にはレーニン主義、トロツキー主義、ボルディガイストなど）⁵の崩壊をも、また意味している。例えば、過去にマルクス主義者の組織は、賃金問題でのストライキを支持あるいは指導する時、それが、a労働者の間に大衆的な情宣をくりひろげる実際の機会であり、b労働者の側に立って聞いている唯一の組織として、c賃金闘争での労働者階級の各個の勝利が現存する資本主義体制を解き放つ一撃であるという考え、で取り組んだ。古典的マルクス主義者の綱領が支持する方法は、今日、この三つの必要条件を満たしていない。⁶

- 3、例えば、利益率の低下、産軍体制の成長、労働力の価値の測定、相対的あるいは絶対的な貧窮化、重大な周期的経済危機など。
- 4、消費と余暇における操作、「若者の反乱」「性革命」、そして権威主義的決定の役割に対する暫時的な承認のような。
- 5、そして、もちろん毛沢東主義とその垂流。
- 6、国家の手中に生産手段を集中化することを強調した、『共産党宣言』で描かれた綱領の概要ですら、官僚主義的な資本主義体制全体と完全に両立しうる。

3

現代社会は、確かに根深く分裂したままである。社会は常に、莫大な労働者の大多数に敵対して機能している。被搾取者は、日常生活における日々の行為一つひとつにいたる搾取から身を守らねばならない。実際今日の人間性の危機は社会主義者による革命によってのみ解決されるだ

らう。しかしこういつた考えは、社会の分裂が今日呈している具体的形態、現代資本主義がどのように機能しているのか、労働者階級が今日採用している新しい諸組織が支配階級とその機構に対していかに闘っているのか、（これらの状況の下で）新しい革命的行動が社会において人々の現実の闘争といかに結合され、それが理路一貫した明快な現実認識といかに関連づけられるのか、その新しい道筋をもし理解しようとしなければ、虚無的な抽象物とか説教、ごまかしのための口実と衝動的な行動主義にとどまる危険がある。その理解を達成するために必要とされるのは、根本的な理論的・実践的な更新以外の何ものでもない。

われわれを導いてきたのは、それらの古典的思想（それらはトロツキスト、ボルディガイスト、そして「左翼」の社会主義者あるいは共産主義者の各派の大部分を去勢してしまった）への単純で硬直した固執より、むしろこの現実である。まさにその着手段階から、われわれは、革命理論の発展のないところに革命行動の展開はあり得ないことを（理論分野での保守主義批判において）主張した。十年後に、マルクス主義経済理論の基礎的仮定と論理構造が「資本家の人間観」⁸に影響を与えたことを示し、革命理論の「全般的再構成」が必要であることを確信するなかで、「革命理論や綱領がどんな内容であれ、労働者階級の経験と欲求にそれがどのように関連するものであれ、前述の理論もしくは綱領が歴史によって追い越されるときが来るであろうという可能性（あるいはより確実な見通しすら）が常に存在しているだろう」と、われわれは結論づけた。さらに、今までその理論もしくは綱領を擁護した人々が、それらを「絶対化」しようとするであろう危険、現代史の生み出した創造物を逆にそ

れらに従属させようとする危機が、常にそこには存在しているだろう。⁹

- 7、『社会主義か野蛮か』1号（一九四九年）四頁。

- 8、ポール・カーダン『現代資本主義と革命』33頁（ソリダリティー刊）

- 9、『社会主義か野蛮か』27号。

4

革命理論の再構成は、永続的な挑戦であり続ける。それは不明瞭で混乱した無責任な修正主義とは無縁である。われわれが伝統的姿勢を放棄しなければならぬというのも、それらが慣習的であり、「それらは時代遅れだ」「時代は変わった」などと陳腐なことを言いつつも、われわれを満足させているからである。われわれはそれに反して、いずれの場合にも、伝統的に確信されてきたことが何故妥当でなく、時代遅れになったのかを示そうと努めてきた。われわれはまた、何によってそれらが取って代わられるべきなのかを明示しようと努力してきた。われわれはあらゆるところで、すなわち革命家集団にとって、それらに代わる新しい形態を明示することが歴史的現実の反駁によって不可能であった（あるいは引き継ぎそうである）——大衆自身による大規模な行動が欠けているところを除くあらゆるところで、この努力を追求してきたのである。このような理論的再構成の困難な諸段階の各々は、革命家集団の戦列内においてすら、活動家の保守的部分の激しい反対に必ず遭遇する。その保守的部分は、労働者階級の運動の黄金時代への郷愁をとどめる者（黄金時代はもちろん、他のすべての黄金時代と同様に明らかに想像上の

ものである）、そしてかつて（有難いことに）確立され、大衆の（日々の）行動によって一層明白に補強された理論と綱領が論議されなかった（と彼が信じている）時代を絶えず惜念しつつ歴史のなかに逆もどりするタイプの活動家に代表される。

10、この反対は、「現代資本主義体制下の革命運動」（『社会主義か野蠻か』31、33号）の論文と、その論文から展開され、以下の頁で素描される思想との関連において頂点に達した。これは遂に分裂へと導かれた。われわれと離れた同志たち（その中にはP・ブルーノ、J・P・レオナルドやR・マージがいる）は、月刊の『労働者権力』を刊行しつづけている。それはもちろん、分裂とわれわれへの反駁のために公然と論争しようとする行動と論理とに貫かれていて。不幸なことに、われわれはそうすることができないでいる。その反論は、肯定的にしろ否定的にしろ、はっきりと説明し定義できる内容を依然もたないままである。今日に到るまで、われわれは、彼らがわれわれの考えを受け入れることを拒む理由のみならず、彼らが反対する正確で明確な理由を知らない。それ故に、われわれは、われわれの考えの輪郭を描くことしかできず、その他には辛うじて保守主義の思想的政治的な不毛さをくり返し指摘できるだけである。

（原注）

5

この保守主義は、いかなる深みにおいても、批判的な検討を全く不可能とする。何故なら、その主要な特徴が、今日の現実的事態を、それら

の存在そのものを否定することによって、常に問題として論議することを嫌悪するからである。それは消極的で不毛な傾向である。この不毛さは、もちろん伝統的なイデオロギーがおちこんだ直接的あるいは思想的な特質による欠陥ではない。それ自身は一つの独立した現象であり、「保守主義者」たちが自から持つ革命理論の、正にその思想的立場とその帰結がもたらす避けられない結果なのである。

ニュートン物理学をすべてのそして雑多な理論から「防禦」する仕事を自からに課す現代物理学者は、自からに全面的な不毛さを運命づけるだろう。そして無論、例えば反物質のように奇怪なもの、同時に波動でありうる粒子、宇宙の拡張と、絶対的なカテゴリーとしての因果律・場・同一性の崩壊に言及する人々を、彼はいつも怒りの爆発へと疑いなく駆りたてるだろう。同様に、今日「マルクス主義を防禦」のみしようとする（あるいは一つかみの思想をそこから借用した）人々の革命的な有様は、全く絶望的なものである。

採用されたこの図式において、マルクス主義の運命は現実そのものによって決定的に規定され、同時にそれは議論を超えたものとなる。われわれが追求している理論的再構成をしばらく離れるならば、マルクス主義は現実的な理論としてはや全く存在していない。マルクス主義は、ちょうど書物のなかで真理を大切に保存するような理論ではなかったし、そうすることもなく、またそうしようとしなかった。この意味において、マルクス主義者の思想は、プラトンやスピノザ、あるいはヘーゲルのようなものでは決してなかったのである。マルクス主義の綱領、その深淵でもっとも革命的な内容によれば、マルクス主義は、絶えず変転す

る世界に光を投じようとする、絶えず更新される理論的努力としてのみ、その生命力をもちえたのである。マルクス主義は、この世界を常に変革する行為として、他方ではこの世界によって、自らが常に変革されることを受け容れる行為（実践におけるマルクス主義者の概念に符合することの二つの分解し難い連関）として、はじめて発展しえたのである。

今日、このような類いのマルクス主義がどこにあるのか？ 一九三三年（ルカーチが『歴史と階級意識』を著した時）以降、マルクス主義を前進させたものがどこで創造されただろうか？ 一九四〇年（トロツキの死んだ日）以来、人々が恥じることなく論議しかつ論議に値する水準において、伝統的マルクス主義の思想を擁護するたった一つの論文がどこで書かれたというのだろうか？ あるいはまた、スペイン内戦よりこの方、自称マルクス主義者集団が真の大衆行動においていかなる有意義な方法を（自らの諸原理にもとづいて）どこで実践したというのだろうか？ 全く、そんなものはどこにもなかったのだ！

今日のこの状況は、悲劇的な道化芝居である。マルクス主義の擁護者は、彼らが「擁護しよう」とする正にそのことによって、そして擁護しようとする正にその行為によって、マルクス主義を打棄し、死に追いやるうとしていて。何故なら彼らは、この四十年の間にマルクス主義に生じたことについて沈黙を守ることによってのみ、マルクス主義を擁護することができるのである。彼らは、あたかも現実の歴史が少しも問題にならないかのように行動している。彼らはあたかも、理論や綱領が現実の世界に存在するか否かが、それらの真実性や重要性を支えるとは考えず、どういふものか常に「どこかよそで」引き続き支えられているかの

ように行動する。彼らは、思想はその使用する言葉によってではなく、それが社会的現実を生成するか否かによって判定されるという、マルクスによってわれわれに教示された不滅の諸原理の一つを「忘れて」いる。伝統的的革命家たちは、この原理をその反対物に、現実的存在事実がこれまでかき乱すことができなかった永遠の教義へと転化することによって、マルクス主義を擁護することができた（仮にその転化が今までに成し遂げられていたならば、理論はその転換によって決して事実を「かき乱す」変革することとはできなかった。言い換えれば、その理論は歴史的に有効なものとなることは決してなかった、という過程を忘れている）。愛する人の早過ぎる死に直面する絶望した恋人は、今や、死体をたたくことによってのみ自らの愛を表現しよう。

11、この規範は、マルクス主義そのものに応用される。この論旨の十分な展開は、カーダン著「マルクス主義の運命」を参照。

6

この強い保守的態度は、徐々にマルクス主義者の正統派そのものの防禦という形をとるようになる。マルクスあるいはレーニンによって一回限り啓示された「真実」に自らを閉じ込めることを、一笑に付されることなく、人々に要求することは明らかに至難の業である。どちらかと言えば、それは必ず次のような形をとって現れる。伝統的な労働者階級の運動が崩壊に直面したとき、伝統的な革命家たちはあたかもこの崩壊が特殊な組織（労働党、TUC、その他多様な党派など）にのみ作用するかのように論じる。資本主義の構造的な変化に直面しながらも、伝統的

革命家たちはあたかもこれが諸変化の累積、あるいはその本質的で知悉された諸特質のいくつかの強調を表現しているだけであって、それ自体は、その基本的なものを何一つ現実には変えていないかのように論じているのである。

このように考えることによって伝統的的革命家たちは、労働者階級の運動の危機が社会民主主義やボルシェヴィキの組織の退歩より深刻となっていることを忘れ（そして他の人々が忘却するのを助長し）ている。この危機は、労働者階級の行動のほとんどすべての慣習的表現に影響を与えている。われわれは、プロレタリアートの健全な革命的体質以外の、単なる外皮を論じない。また運動が直面している危機は、外部から労働者階級に加えられたある種の非難でもない。反対にこの危機は、プロレタリアートの状態の、そのみならず転換期がもたらす危機的状态の、正に核心的な問題を反映している。伝統的的革命家たちは、資本主義のある特徴の量的累積が質的転換の深刻な進行を伴っていることを忘れ、また他の人々の忘却を助長している。現代社会では、「プロレタリア化」は古典的マルクス主義においてそれに帰されていた純真な意味をもたないものである。また官僚化は、資本集中化の過程に対する単純で皮相な当然の帰結ではなく、社会の構造と機能に重要な変更を必然の結果としてもたらす何ものかなのである¹³、伝統的な革命家たちは単純に一つあるいは二つの「追加的」な解釈をのみし付け加えている。あたかも、理論と実践を結合する歴史・世界認識としてのマルクス主義の主張が、物置のジャガイモ袋の堆積のように、多少のものを投げ入れてもその基本的本質は改造されないであろうその本質への「追加」を受け容れるかのよう

に。

そうすることによって、伝統的的革命家たちは未知の水準に高め、それは、新たにそして遂には歴史を一つの巨大な自明の真理に帰すること、すなわちすべての問題を抑圧することに等しい。最良の場合にも、伝統的的革命家たちは「最低の修正」ですまそうと努めるが、それはちょうど一日一日財政的破産への確実な途を進むように、結局はイデオロギー的破綻へと不可避免的にむかう途である。心理的には理解できるが、われわれにとってこの態度を支持することは不可能である。

いくつかの理由によって、一度ある限界に到達したところの、このような接近方法はもはや取りあげることができない。一つの理由は、それが本来相反するからである（思想は現実が変化する一方でそのままにとどまっていることはできず、新しい現実が思想的な変革なしに理解されることはない）。もう一つの理由は、このような態度が神学的であるという点である（すべての神学のように、それが本質的に表現しているものは、未知に直面したときの恐怖と根本的な不安とであり、われわれはこれらの不安を共にする理由をもたない）。

12、『プロレタリアと組織』参照、『社会主義が野蠻か』27号。

13、『現代資本主義と革命』参照。

7

今日の現実が、もはや古典的マルクス主義の安易な修正を通じては、あるいはより広範で重要な修正によってすら、把握できないことを正しく認識するときに明らかに到来している。理解されるべきは、今日の現

実が新しい思考体系を要求していること、その体系においては伝統的イデオロギーとの断絶がその結合よりも重要（そしてはるかに有意義）であるということである。われわれ自身の眼でさえ、多分、われわれの理論的緻密さにおける緩慢さによって、なおまた疑いもなく、可能な限り長い期間にわたって歴史的継続性を維持したいというわれわれの希望によって、この事実は覆い隠されている。しかしこの断絶の要求は、われわれが旅立ってその土地をふり返るときのように、われわれが今われわれにとつて本質的であると考えた思想を古典的マルクス主義と分かち距離を測定するときに¹⁴、もつとも明白に現われる。いくつかの具体例をあげることにしよう。

a、古典的マルクス主義にとって、社会の分裂は生産手段を所有する資本家と無所有のプロレタリアとの間にあった。今日、この分裂は秩序付与者（指揮者）と秩序受容者（演奏者）との間に見い出されるはずである。

b、社会はかつて、非個人的な資本の抽象的な力によって支配されているとみなされていた。現在われわれは、社会が社会生活のあらゆる局面に作用している階層制と官僚制の機構によって支配されているとみる。

c、資本主義社会の連関を理解するために必要な基本カテゴリーは、マルクスにとつては具象化のカテゴリーであった。具象化は、すべての人間的関係を市場関係に置き換えることによって引き出された¹⁵。他方われわれにとつて、現代社会の構造を形造っている主要な因子は「市場」ではなく、人を官僚的・階層的な「組織」に駆り立てるものである¹⁶。現代社会の連関を理解するために必要な基本カテゴリーは、管理と集団行

動の遂行との間に横たわる分裂である。

d、「具象化」の概念は、マルクスにおいては、「それ以上でもそれ以下でもない」商品としての労働力の分析に必然的延長を見出した。商品としての労働力は（マルクス主義によれば）、「客観的」要素（生産と再生産のための原価）によって決定される交換価値と、買手がなしうる限り引き出すであろう使用価値をもっていた。労働者はそこでは、資本主義経済と資本主義生産の受動的な対象物とみなされていた。この抽象化は、われわれにとつて部分的にはすでに神秘化である。労働力は、（正にそのようなものにして）とする資本主義の努力にもかかわらず）純粹で単純な商品としての水準には決して帰着されえない。そして、「客観的」要素によって決定される労働力の交換価値のようなものは存在せず、賃金水準は基本的には「公式」あるいは「非公式」の労働者階級の闘争によって決定されるのである。とりわけ、定義しうる労働力の使用価値といったものはない。生産力が、生産における絶えざる闘争の、労働者が共に客体であり行動する主体であるところの闘争の、対象である。

e、マルクスにとつて、資本主義固有の根本的「矛盾」は、生産力の発達がある点を越えると資本主義的所有形態と生産の私的占有とを敵対関係に追いやり、「それらをばらばらに破壊する」に違いない、と考えられた。われわれにとつて、資本主義を支配する内在的矛盾は、現代資本主義が引き起こしている管理と実施との間の分裂状態によって例証されている。それらの行動との関連において個人の参加を排除し同時に要請しようとする努めている資本主義の不可避の要求に、それは原因している。

f、プロレタリアートは、古典的マルクス主義によれば、資本主義体制が崩壊するまでその歴史の重圧に耐える。しかしわれわれにとっては、プロレタリアートは与えられた諸条件のもとに絶えず自らの歴史を創造する。階級闘争は常に資本主義社会を変革し、そして階級闘争の進路において、プロレタリアートはそれ自身が変革される。

g、古典的な考えによれば、資本主義文化は純粹で単純な神秘化（人はこのようなものを公然と批判しなくてはならない）と、科学的真実やりっぱな根拠ある仕事（人はそのときは特権的な諸階層による排他的な専有を公然と非難する）を産み出す。われわれにとって現代文化は、（そのすべての表現において）社会の一般の危機に与り、そして同時に人間生活の新しい形態のための基盤を準備する。

h、マルクスにとって、生産は「必要の範囲」内にとどまるものであったらう。そこから、マルクス主義者の運動全体における盲目的な、社会主義とは本質的には「中立的」かつ「必然的」な技術的・下部構造の経済的・社会的帰結を再整理することにある、という態度がもたらされる。われわれにとっては、生産とは結合された生産者による創造という範囲とならねばならない。技術的意識の変化と、そのように変化させられた技術を生産者の自由に委ねることは、革命後の社会の中核的連関の一つでなくてはならない。

i、すでにマルクスにとって（マルクス主義者の運動内部にとつてはさらに一層）、生産力の発展は歴史過程の中心であるとみられていた。このような生産力の発達と生産の資本主義的関係の矛盾が、これらの諸関係の歴史的廃棄を指命する。ここから全く自然に、生産手段の国有化

経済の計画化と社会主義との同一化が導き出された。社会主義の本質は、われわれにとって、人間生活のすべての側面にわたる——その第一は彼らの仕事の場における人々の優位である。それは、社会主義が結合された生産者による生産の管理以外には、また労働者評議会の力なしには考えられないという結論を導き出す¹⁷。

i、マルクスにおいて、「ブルジョアジーの権利」（それ故、賃金の不平等）は、過渡期の間一般的に行使される。われわれにとっては、もし賃金の絶対的平等を直ちに制定できないならば、革命社会は生き残ることも発展することもできないだろう。

k、最後に、（重要な相違点という範囲内で議論を続けると）伝統的な運動は、常に、経済決定論と党の絶対的役割という二つの概念に支配されてきた。われわれにとって全てのものの中心にあるのは、社会主義のいかなる思想をも直ぐに神秘化することではなく、労働者階級の自治権、労働者自身が自らの行動を管理する大衆の能力にある。これは、革命過程、革命組織、そして革命的政治の本質に関する新しい概念を必要としている。

これらの思想（正しいか否かはこの段階では問題ではない）は、正に「追加」あるいは「部分的修正」ではなく、全面的な理論的再構築の基本的要素を構成することを理解するのは困難ではない。

14、われわれの思想は、『社会主義が野蛮か』に発表された多くの論文によって展開された。とくに、一号の論説「ロシアにおける生産諸関係」2号「社会主義者の綱領」10号「プロレタリアの経

験」11号「労働者と労働組合官僚」13号「社会主義の内容」17

・22・23号「ポーランドとハンガリーにおける革命」20号「工

場と労働者管理」22号「労働者階級の組織」27・28号「労働者

と文化」30号「現代資本主義体制下の革命運動」31・33号、の諸

論文を参照。（原注）

15、ルカーチが彼の著作『歴史と階級意識』の主要なテーマを具象化の分析に献じているのは、マルクスの教義のもっとも重要な局面に對する深い忠誠である。（原注）

16、この駆り立てるものの根源については以前に記述され（「現代資本主義体制下の革命運動」）、再びこの先で述べられる。

17、『労働者評議会と自主管理社会の経済』を参照。

8

人々は、この再構成が思想内容にのみ影響するのではなく、人々が試みている理論的再構成そのものの形態にもまた影響することを同時に把握しなければならない。今日において、労働組合主義の否定的側面を除くする一方で、かつてのその積極的な側面をなんとかして結びつけることによつて、労働組合の「代用物」としての組織形態を捜し求めようとすることは不毛であらうし（要するに、「実際」にはまだ存在しないし、なおそのままにとどまっているであらう組合の、新しい組織形態を創出しようとする）、また、そこに旧弊でない「もう一つのマルクス主義」がとにかく存在しうのだと信じることも、同様に幻影的であるだろう。マルクス主義の破綻は、他のいくつかの思想の破綻とは少し異な

る（破綻にもかかわらず——それは強調される必要がある——そこには今後とも無視することのできない多くの基本的な認識と、歴史や社会に対する洞察が依然存在する）。それはまた、諸思想の間に、そして思想と現実もしくは行動との間にあった一つの統一形態の破綻でもある。要するに、それはいくつかのいわゆる「科学的」体系を通して、真理、全体的真理、そして歴史的なその時代とその周辺に広がる真理を、おおうことができると信じられていた「閉された」理論概念（さらには、閉された「理論—実践」体系）の破綻である。

この破綻とともに、労働者階級の運動の歴史的な全局面（実際は、人間の歴史の全局面）は一つの終焉に至らうとしている。われわれそれを他の神学よりも良くもなく多分に悪いであらう（確かにそうである）「科学的」神学を付与する、神学的な局面と呼ぶことができる（なぜならそれを信ずる者に、信念が「合理的」であるという誤った確信を与えるからである）。さらに、至高の存在あるいは「例外的」な人間もしくは人間集団、一度限り確立された教義において一体となった非人格的な真理を人々が信ずることによつて、それは歴史の一つの局面となる。それはまた、想像と現実、理論と実践における彼自身の創造から疎外される局面でもある。「完全」な理論は決して再び現われず、単に定期的な「更新」を要求するに過ぎないだろう。偶然にも、このような理理論も実際には決してこれまで存在することがなかった。何故なら、すべての偉大な理論的発見は神話となる傾向をもち、やがてそれらは、マルクス主義も他と同様に、自らを体系に変えようとした。そこにあり、またあらねばならないものは、唯一つ実地的な理論上の過程であり、真理

の契機が遅かれ早かれ（異なる何かを意味するであろう新たな全体性に対する統合によつてのみ）超越されねばならないときに現われるであろう道筋である。これは、哲学的懷疑論としては取りあげられないだろう¹⁹。時代の各々の瞬間において、またわれわれが理解する各々の程度

において、真実と偽りが確かに共存し、そしてそこには常に事柄を暫定的に加算し、何が真であるかの（たとえ変換され、可変的なものでさえ）全体的な視点を捜し求めようとするものがある。しかし、完全な思想と決定的理論は、現代においては官僚たちの白日夢以外の何ものでもなく、とりわけ抑圧を巧みに操るために彼を助ける道具以外の何ものでもない。後者にとって、このような視点は、現在においては、本質的に不合理な忠誠の等価物でしかありえない。

その故にわれわれは、われわれの発展の各段階において、自らが確信をもてるものを主張しなければならない。しかし、われわれはまた自らの熟考と実践の新分野において、その解決を前もって知ることができないであろう諸問題、われわれを困惑させ、実際われわれに信念を放棄することを強いるかも知れず、解決までに生き長らえることができないかもしれないような諸問題が、見い出されるであろうことを認識しなければならない。そして煩のなかで舌を使つてはならない。日々の生活において、われわれの一人ひとり（彼がそれを知ろうと知るまいと、また欲しようと思まいと）、このような未知に直面するとき、明晰さと勇氣を示し創造的に対応することを強要される。革命的な政治学は、神経質な厳正さ、安心を求める神経質な欲求の最後の避難場所となることはできない。

18、このような時まで、生産の発達と人間的態度の変化、特にまず「消費」へと駆り立てるものより強い他の動機が出現することは、「賃金」と「収入」に関する役割を社会から無きものにすることを是認する。

19、あるいは哲学的ニヒリズム。

人類の運命は今や、以前よりもはるかに地球的な規模において提出されている。われわれは日々、一つあるいは他の形において、産業化されていない諸国と産業化された国々との関連において、後者に住む人類の三分の二の運命に直面し、またより深い水準においては、徐々に生まれつつある世界的規模の社会の構造と動態に直面している。しかし、現代資本主義社会に住むわれわれにとって、第一の仕事はその社会を分析すること、その内部に生じた労働者階級の運命の運命を理解すること、そしてその特異な環境に住む革命家が自ら設定するであろう方針を決定すること、である。この仕事は、客観的にみても、第一義的なものである（何故なら、それは世界を支配し、他の国々の進歩にますます大きな影響を与えている現代資本主義の存在形態であるからである）。その仕事は、われわれにとつてもまた第一のものである。何故なら、もしわれわれが自らの環境との関連における自らの本質（理論的にも実践的にも）を明らかにできないならば、われわれは何一つ意味をもちえない。正にこの定義づけへと、われわれは今や向かわねばならないのである。